

湿地を訪ね、 湿地に学ぶ



湿学のすゝめ

荒尾干潟
東よか干潟
肥前鹿島干潟
諫早湾干拓堤防道路
編



はじめに

名古屋市の南西部、庄内川・新川・日光川の河口部に広がる藤前干潟は、多くの生きものが暮らす「生きものの宝庫」。地球を旅する渡り鳥たちが羽を休める重要な中継地としても知られています。

30年以上前、ごみの量の増加に伴い藤前干潟をごみの埋立処分場にする計画が発表されました。しかし、藤前干潟保全の機運が高まるなか、名古屋市は1999年1月に埋立計画の中止を発表。翌月「ごみ非常事態宣言」を出し、市民・事業者・行政総出でごみの減量に取り組むことで、藤前干潟は守られました。

藤前干潟は、2002年11月18日にラムサール条約の「国際的に重要な湿地」に登録されました。以降、藤前干潟では、清掃活動や干潟体験イベントなどさまざまな活動が行われています。

ラムサール条約登録から約20年。名古屋市では干潟の保全・活用をより促進するため、「国内湿地交流事業」を実施しています。本事業は、湿地を保全・活用するための優れた取り組みを行っている国内のラムサール条約登録湿地等を視察し、そこで得た知見を藤前干潟の活動に活かすことを目的としています。湿地について学ぶことから「湿学」と名付けました。

この報告書は、他の地域の湿地の取り組みから何を学び、藤前干潟の保全・活用にどう活かすのか、派遣者の立場からまとめたものです。

事前学習会

視察を前に派遣者が集まり事前学習会を行いました。
藤前干潟について学び、視察先の干潟についての理解を深めました。

日時 令和6年11月17日(日)
場所 環境省稲永ビクターセンター・名古屋市野鳥観察館



体験して初めて気づくこと

NPO法人藤前干潟を守る会のガタレンジャーのみなさんとともに、干潟体験を行いました。

藤前干潟の中に入るのはけが等の危険性があるため、イベントなどで干潟に詳しいガイドと一緒に入ることが推奨されています。稲永ビクターセンターから歩いて10分ほど。入る前は3つの約束を確認します。1つめは「生きものたちと仲良くしよう」、2つめは「楽しいことは分け合おう」、3つめは「けがは自分持ち、気をつけよう」。生きものたちの住処であるため「お邪魔します」と言ってから入りました。石をひっくり返すとヤマト

オサガニなどのカニやシジミなどの貝がたくさん。藤前干潟の生きものの豊かさを実感できます。帰り際にはごみ拾いを行い、ごみの多さを痛感しました。また、名古屋市野鳥観察館で野鳥観察を行いました。大型の望遠鏡が30台もあり、大人数でも野鳥を観察できる設備が整っています。藤前干潟にいる鳥の種類が多さに驚きました。



保全の意義と今後の課題

NPO法人藤前干潟を守る会の間部裕子さんから、藤前干潟の保全の歴史を学びました。

かつて、藤前干潟にはごみの埋立処分場を建設する計画がありました。が、市民の保全意識の高まり等を受け、名古屋市は計画を中止。藤前干潟は保全されることになりました。

生態系にとって重要な役割を担う藤前干潟ですが、海洋ごみやマイクロプラスチックの問題は、大きな課題となっています。また、近年では、飛来する野鳥が釣りごみ(釣り糸など)に絡まりけがをするなどの事例が多くなっています。

美しく豊かな海を次の世代に残していくために、海に負荷をかけている行為に目を向け、私たちができることを行い、社会全体でも対応していかねければなりません。



視察先の湿地について知る

鹿島市ラムサール条約推進室の中村さやかさんとオンラインでつなぎ、有明海の3つの干潟について、各干潟の特徴や抱えている課題などを学びました。

中村さやかさんは鹿島市ラムサール条約推進室で子どもたちへの普及啓発活動を行っています。野鳥観察歴は35年以上にわたり、特に有明海の干潟に生息する鳥や生きものへの愛着が深いとのこと。さらに、イラストレーターや写真家としても活動し、自然や野鳥をテーマにした作品を多く手がけていらっしやいます。

中村さんが描かれた東よか干潟の野鳥イラストがとってもかわいらしく、カラフルで目を引きまします。季節によって観察できる鳥の種類を楽しむながら知ることができました。

有明海の3つの干潟と藤前干潟はどのような類似点や相違点があるのか、現地視察で見えるのが楽しみです。



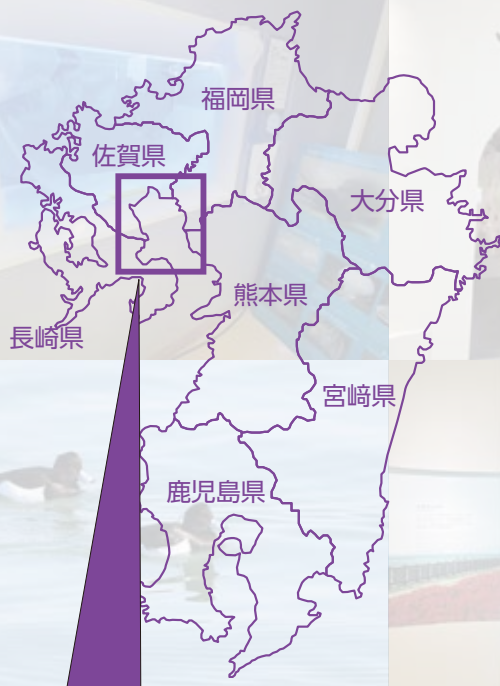
i Illustration by Sayaka (@sayakasbs)

藤前干潟～都会に残された貴重な干潟～

名古屋市・飛鳥村に位置する、ラムサール条約登録湿地面積323haの広さを誇る干潟です。

大昔より伊勢湾には多くの河川が流れ込み、河口部には広大な干潟が形成されていました。しかし、農地や工場、港湾施設などの開発で次々と埋め立てが進むなか、最後にわずかに残った干潟です。

干潟の泥の中には鳥の餌となるゴカイや貝類などの底生動物が豊富に生息しており、シギ・チドリ類の東アジアーオーストラリア渡りルート上における中継地としても重要な場所となっています。



1/18 土 Day 2

諫早湾 前面堤防中央部公園
諫早湾 北部排水門
諫早湾 潮受け堤防展望所
荒尾干潟水鳥・湿地センター

6 5 4 3

1/17 金 Day 1

JR 名古屋駅
JR 博多駅
肥前鹿島干潟見晴らし台
鹿島市干潟交流館 “なな海”

2 1



1/19 日 Day 3

東よか干潟ビジターセンターひがさす
JR 博多駅
JR 名古屋駅

7

Special Thanks !

お世話になった方々

NPO 法人藤前干潟を守る会
間部 裕子 さん

NPO 法人海の自然史研究所
今宮 則子 さん

鹿島市ラムサール条約推進室
中村さやか さん

荒尾市市民環境部環境保全課
荒尾干潟水鳥・湿地センター
課長兼センター長
福本 謙二 さん
ほか職員のみなさん
ボランティアスタッフのみなさん

東よか干潟ビジターセンターひがさす
センター長
古川 尋美 さん
ほか職員のみなさん
ボランティアスタッフのみなさん

豊かな諫早湾と地域を創る会・代表
干潟を守る日 2025 in 諫早実行
委員会・委員長
大島 弘三 さん

有明海漁民市民ネットワーク・
現地事務局
時津 良治 さん

佐賀県有明海漁業協同組合大浦支所
平方 宣清 さん

お世話になった施設

鹿島市干潟交流館 “なな海” ②
佐賀県鹿島市音成甲4427-5



荒尾干潟水鳥・湿地センター ⑥
熊本県荒尾市蔵満20-1



東よか干潟ビジターセンターひがさす ⑦
佐賀県佐賀市東与賀町大字田中2757-4



現地視察 旅の記録



肥前鹿島干潟に学ぶ

肥前鹿島干潟見晴らし台……
鹿島市干潟交流館「なな海」……

② ①

バードウォッチングを楽しむならば
見晴らし台がおススメ

肥前鹿島干潟の見晴らし台から見る干潟は、多くの野鳥が飛来しバードウォッチングを楽しむには最適な場所です。訪れた1月の干潟にはおそらく千羽は越えるであろうツクシガモの大群や、カモメはほぼこの一択とも思えるほどのズグロカモメ。サギに混じってクロツラヘラサギも藤前干潟では数羽から数十羽程度しか見ることができない種類が優占種となっている光景は、さすが大陸に近い九州の干潟と思いました。干潟を見渡せる見晴らし台には観察できる野鳥の案内のほか、2台の大型双眼望遠鏡が設置され自由に野鳥観察ができるようになっています。

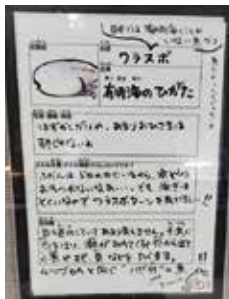
干潟の泥はトロトロ。火山灰由来の粒子の細かい粘土質の泥で形成され、その表層にはケイソウなどの植物性プランクトンなどが多く、それらを餌にするムツゴロウなど干潟の生きものもたくさん生息しています。そしてそれらを求めシギ・チドリ類をはじめ多くの水鳥たちが飛来する豊かな干潟になっていることを実感しました。



工夫いっぱいの施設

鹿島市干潟交流館「なな海」は2階建てで、1階は干潟体験の受付と干潟から上がってきたときに使用するシャワールームがあります。2階に上がると、入口を入ってすぐ右手にムツゴロウ、ワラスボ、シオマネキなどを飼育しているとても大きな水槽があり、向かいには干潟の生きものと触れ合える水槽がありました。

館内へ進むと有明海周辺の生きものを展示したミニ水族館があり、壁はめ込み型の水槽にはメナダやワラスボ、アカエイなど有明海や有明海の干潟に棲む生きものが展示されており、向かい側にはヤマノカミなどの有明海にそぐ川の生きものや干潟の底生生物が展示されています。生きものを展示するだけでなく、読みたいと思わせるような生きものの気持ちに例えた紹介文や豆知識、似顔絵など親しみを持ちやすい工夫がされています。また、展示内容には食文化や民俗、伝統漁法などの文化についても見られ、展示方法の工夫や幅広い内容の展示があることで、小さい子から大人まで見に来たいと思える施設になっているのだと感じました。



鹿島市の充実した湿地教育

鹿島市ラムサール条約推進室の中村さやかさんから、鹿島市の小学校の環境教育についてお話を伺いました。鹿島市では、2016年から鹿島市内の全小学校7校で行われています。〈湿地教育を全ての子ども達に〉という目標があり、年間50回、体系化された7つのプログラム（干潟体験、渡り鳥の学習、野鳥観察、生態系の学習、干潟の働きの実験、環境汚染の学習、水生生物調査）を開催しています。干潟や干潟を取り巻く環境の実態を様々な活動を通して学ぶことができるようになっていきました。

私達は干潟の働きが分かる実験を体験しました。泥が水の汚れを吸着する↓それが海底に沈む↓底生生物のエサになる↓海がきれいになるというのを理解できるというもので、子どもだけでなく大人にも楽しめる実験でした。市から配布されている「かしまのしぜん わくわくブック」では、まず子どもに干潟の魅力を知ってもらい、干潟の泥について実験をすることで実際に目で見てもらう、そしてイラストを用いて環境問題について考えるというプロセスが、「有明海の魅力を伝える」という本来の目的につながることを実感しました。また、月に1回小学校4年生から6年生に発行されている「らむさーるだより」では、登場人物と小学生がリンクしており、漫画形式で読みやすいように、体験して終わりでなく、学びが続けることができると言われています。



肥前鹿島干潟～生きものも人も愛し愛される干潟～

有明海の最奥に広がり、佐賀県鹿島市に位置するラムサール条約登録湿地面積 57ha の干潟です。渡り鳥の飛来地として有名で、主にクロツラヘラサギ、ツクシガモ、ズグロカモメ、チュウシャクシギなどが飛来します。泥の中に潜むムツゴロウやワラスボを獲る「むづかけ」や「すぼかき」という伝統漁が行われています。

泥質は火山灰が混じったトロトロの泥で、干潟の上は動きづらいため、幅 30cm、長さ 2m ほどの板を干潟の上に置き、片膝を乗せ、もう一方の足で泥を蹴って前へ進む「潟スキー」が考案されました。この「潟スキー」をはじめとする様々な競技を干潟の中で競い合う、干潟の運動会「ガタリンピック」が開催されており、全国内外から多くの人が集まります。

【※鹿島ガタリンピックの開催場所はラムサール条約登録地の肥前鹿島干潟内ではなく、道の駅鹿島前の干潟です。その点をご留意ください。】



諫早湾干拓堤防道路に学ぶ

- ③ 諫早湾 前面堤防中央部公園
- ④ 諫早湾 北部排水門
- ⑤ 諫早湾 潮受け堤防展望所

広大な調整池と農地…もとは干潟だった場所

諫早湾で活動されている大島弘三さん、時津良治さんにお話を伺いました。

前面堤防中央部公園からの視察では、広大な調整池に圧倒されました。バスでそこに着くまでも広い農地が続きます。もとは干潟だった場所です。野菜の収穫をしている農家さんの姿もあり、とにかく広いので大変そうだなあと思いました。うまくいわずに廃農したところもあるそうです。

調整池の水際は、今ではヨシ原が広がり低木も生えて陸地化しています。締め切り前には見られなかった景色です。見学していた短い時間内にイタチやハイイロチュウヒを見ることができました。環境の変化はあるものの、まだ自然が残っていると感じました。公園内で休日を通ぐす親子やバードウォッチャーもいて、憩いの場所になっています。「諫早湾干拓事業の概要」の説明看板が設置してありました。



北部排水門からの視察では、調整池の水が有明海に流れていることを知りました。冬場だからか、調整池の水も普通の池の水と変わらないように思いましたが、毎年夏には有毒なアオコが発生するなど水質が悪化します。この汚れた水が一方的に海に排水され、有明海では赤潮が発生し貝類が死滅することがあります。干潟があれば水質浄化作用で被害はなくなるかもしれません。

潮受け堤防道路を通り中央の展望所も視察しました。道路利用者にとっては、駐車ができトイレもあり景色の良い休憩所になっています。この日も多くの利用者がいました。諫早湾問題を知っている人はどのくらいいるのだろうかと思ひました。

様々な立場の人が話し合う場の大切さ

潮受け堤防展望所では、タイラギ漁師であった平方宣清さんにお話を聞きました。

昔のタイラギ漁では、1分間に100個採れていたが、諫早湾工事の着工と共に激減して20年以上休漁しているそうです。

私は、諫早湾の実態をこの事業に関わるまで知りませんでした。実際に諫早湾に関わる人の話を聞くことで、当事者の思いや実態がよく分かりました。そのため、実際に人に聞く機会や知る機会をつくるのが大切だと実感しました。

また、このような問題は、課題や自身とのつながりが分からないと自分事として捉えることができないと思います。そこで、現状の課題や生活とのつながりを分



諫早湾干拓堤防道路

諫早湾は有明海西部に位置しています。長崎県諫早市は、1997年に干拓事業に伴う諫早湾締め切りを行いました。全長7kmの潮受け堤防を造り、北部と南部の排水門で本明川の水だけ海へ流し、西側へ海水を完全に入れないようにしています。

堤防道路の西側には、広大な調整池があり、さらに前面堤防から中央干拓地が広がります。

堤防上は諫早湾干拓堤防道路（雲仙多良シーライン）が通り中央には展望所があります。



1/18 ± | Day 2

荒尾干潟に学ぶ

荒尾干潟水鳥・湿地センター

⑥

私にとってのアナジャコの聖地

荒尾干潟水鳥・湿地センターを訪れました。展示内容は荒尾の自然や（漁業などの）営みなど7つのゾーンにまとめられていてわかりやすく、生きものの生体展示やハンズオン展示もあつて、楽しみながら見学することができました。床には有明海全体の地図があり、ムツゴロウなど干潟に生息する生きものが子ども目線より低い水槽に展示されています。

私が見たかったマジジャク（アナジャコ）コーナーでは巣穴を型取りした実物展示もあり、藤前干潟のアナジャコの巣穴と比較できて興味深かったです。筆を使ったマジジャク釣りを疑似体験できる展示や、郷土料理の食品サンプルを使った料理の紹介展示もありました。荒尾干潟の美しい夕日の写真が飾られたコーナーで

は、インスタ映えすることなどでメディアにも取り上げられており、荒尾干潟の魅力が多方向から発信しているという取り組みが感じられました。

ワークショップも充実していて、シオフキという二枚貝の殻にメッセージや絵を描けたり、潟泥ぬりえ体験コーナーでは干潟の泥でぬり絵や、イラストを描いたり、手形取りもできます。無料で気軽に参加できる仕組みは、思い出作りにものないなと思います。



取り組みの姿勢

荒尾干潟保全・賢明利活用協議会作業部会メンバーのみなさんと交流を行いました。協議会会長は地元漁協の組合長さんで、多様な立場の人が荒尾干潟に関わっていることを知りました。作業部会メンバーは現在約25名です。活動のコンセプトは、「出来る時に出来る人が活動する」。メンバーの空き時間や能力に応じて活動しています。また、「やってみることが大切」とし、企画案の検討を重要視しています。面白そう・やってみたいと感じた企画は、実施の大変さで諦めず、実現させようとしています。「サンセットカフェ&コンサート」や「テラー体験」を始めとしたさまざまなイベントにチャレンジされている熱意に引き込まれました。「ここ

でしかできないことは何か？」という視点から、勉強会やガイド用ハンドブック作成など、荒尾干潟ならではの「楽しさ」をとことん追求されていました。



シロチドリ群れとハマヒバリとの遭遇

近くの海岸に熊本県では初確認となるハマヒバリが来ているとのこと、センターの職員さんが案内してくれました。ハマヒバリは、餌を探したりうずくまったり休んだりしていました。落ちていた様子で、じっくりと観察できました。初めて見ることで、嬉しかったです。

干潟の野鳥観察では、荒尾市の鳥でもあるシロチドリの群れを見ることができ、他にはズグロカモメの群れやクロツラヘラサギも確認できました。藤前干潟でも人気のあるミサゴも4、5羽確認でき、私達の目の前で魚を捕ることに成功！と思いきや、他のミサゴが魚を奪いに絡んできたりとハラハラとしたシーンも見れました。



荒尾干潟～渡り鳥のオアシス、自然と共生できる場所～

有明海の中央部東に広がり、熊本県荒尾市に位置するラムサール条約登録湿地面積754haの干潟です。2012年、有明海ではじめてのラムサール条約湿地に登録されました。

比重の軽い火山灰質の粒子の細かい土砂は湾内海流で肥前鹿島や東よかなど有明海北西部の干潟に運ばれて堆積しています。そのため、同じ有明海でも荒尾干潟は歩いて沈みこむこ

とはなく、佐賀県側の泥干潟とは性質が大きく異なっています。砂泥質の干潟にはアナジャコやゴカイ類、アサリなどが多く住み、沖では海苔養殖が行われており、古くから沿岸漁業が盛んな地域です。とくにアナジャコは「マジジャク」と呼ばれ、伝統漁法のマジジャク釣りは大会が開かれています。



1/19日 | Day 3

東よか干潟に学ぶ

東よか干潟ビジターセンターひがさす……⑦

東よか干潟の未来の創造

東よか干潟ビジターセンターひがさすを訪れました。館内ではボランティアガイドさんに案内していただき、「ひがたのシアター」で東よか干潟のハマシギを通じた四季のダイナミックな映像を見ました。「ひがたの旅展示室」では、シチメンソウの展示や、生きものの展示を見ました。天井から降りた二つの筒の中を覗くと、巨大なダイシャクシギとクロツラヘラサギが口を開けている模型があり、鳴き声も聞こえます。捕食される干潟の生きものの気分になれる展示はとても面白かったです。「ひがたのパノラマ展望台」では、地上13mから有明海の絶景を見渡すことができ、東よか干潟の広大さを実感することができました。インフォメーションコーナーでは、来館者とスタッフが気軽に話すことができます。地中熱を利用した冷暖房設備の展示もあり、子どもたちの環境学習の素材としても活用するなど、様々な方面で地域の活性化を図る拠点となっています。



組織体制やプログラムについて

東よか干潟が抱えている問題や、自然環境の変化について、職員さんやボランティアガイドさんと意見交換を行いました。藤前干潟でも渡り鳥の飛来数の減少や、ごみ問題などが深刻化してきている中で、東よか干潟も同様に自然環境の劣化を訴えていらつしやるのが印象的でした。藤前干潟だけでなく、全国の干潟に影響が出始めているという危機感を持ったとともに、少しでも多くの人に干潟の環境を守る大切さや、干潟が私たちの生活に大きな影響を与えているということを伝えていくことが重要であると感じました。

来訪者に干潟や渡り鳥の説明を行っていました。さらにより干潟の良さを伝えるために、一方的な案内をするのではなく、聞き手の思いを捉え、相手の興味関心を理解したうえで交流することを心掛けられており、「まずは干潟を知ってもらおう」という意識が素晴らしいと感じました。東よか干潟では、干潟や有明海の価値や魅力について学び、そのことを多くの人に伝え、活動の輪を広げていくための未来のリーダーを育てることを目的として、地元を中心とした小学生が集まって「東よか干潟ラムサールクラブ」という活動をされています。若い世代の育成を通じて、よりたくさんの人に干潟の魅力や現状を伝える、そして後世につなげるためのヒントを学びました。



シギ・チドリ類の渡来数日本一の干潟にて

野鳥観察では、多くのカモ類やシギ、クロツラヘラサギなどが観察できました。藤前干潟では数羽しか越冬しないダイシャクシギが群れでいたので、普段見ることができない光景を味わうことができました。非常に広大な干潟に数多くの鳥類が集まっているのは壮観でした。堤防近くにはシチメンソウが多く群生しており、芽吹きはじめの様子が観察できました。秋の紅葉の時期に、再度訪問したいです。



東よか干潟～有明海がもつ自然的価値の啓蒙～

有明海の湾奥部北岸に広がり、佐賀県佐賀市に位置する、ラムサール条約登録湿地面積218haの干潟です。干満差は最大約6mと日本最大であり、干潮時は見渡す限りの広大な干潟が姿を現わします。

渡り鳥であるシギ・チドリ類の渡来数は日本一を誇り、絶滅危惧種を含む水鳥類の国内有数の中継地・越冬地となっています。

また、ムツゴロウやワラスボ、シオマネキなどの泥干潟特有の生物も多く生息しており、遊歩道からは、引き潮時に無数のカニやトビハゼなどが観察できます。

また、希少な塩生植物であるシチメンソウの国内最大の群生地であり、秋には美しく紅葉し、晩秋における有明海の風物詩となっています。

事後学習会

すぐにできそうなこと

伝える

- ・来館者にイラストや写真を用いて解説する
- ・干潟を初めて知ってもらう人に対してただ情報を伝えるのではなく、楽しさを感じてもらえるように話すなど、相手によって伝える方法を変える

発信する

- ・近隣体育施設に目を引くポスターやチラシの設置する
- ・広報キャラクターを活用した魅力発信を行う

いつか実現したいこと

企画する

- ・藤前干潟のマンホールを作成し、マンホールカードを来館者へ配布する
- ・藤前干潟のグッズを制作する
- ・若者の有志メンバーによる勉強会やクラブ活動の活性化による新たな視点でのイベントを実施する
- ・高校生向けの講座を開き、ユース世代の増加を図る
- ・幅広い世代が一緒になって考えを交換する場を作る

行う

- ・様々な湿地に足を運んで体験し、現状や課題を確かめる
- ・多方面からの意見や話を聞き、自分の意見をもつて多くの人と意見交換を行う
- ・各施設で行われていたワークショップやイベントを藤前干潟でも実施する
- ・各湿地が抱える課題を各湿地間で情報交換し、良い方向になるよう協力しあう
- ・干潟に行かなくても実際に近い体験や、保全・活用の意義が感じられるプログラムを実施する

作る

- ・再訪者向けに難易度高めのスタンプラリーカードなどを配布する
- ・館内で展示している生きものの紹介を印象に残るようなおもしろいものにする

教育

- ・市内の全小学校で干潟の校外学習を行う
- ・学校教育で子どもたちに伝える
- ・小学生を対象に年間を通したプログラムを実施する
- ・区ごとの環境教育プログラムの実施する

発信する

- ・メディアやご当地アニメなどを活用して市民へのプロモーションを行う
- ・藤前干潟の特徴となるものを考えてPRする

視察を終え、事後学習会を行いました。視察を振り返るとともに、今後、藤前干潟においてどのような保全活動を展開できるのかを話し合いました。

■日付 令和7年2月1日(土)
■場所 名古屋市環境学習センター(エコパルなごや)

同行者から派遣者への今後へのメッセージ

今回の派遣者のほとんどはガイドや生物調査、環境教育などの藤前干潟に関わる活動をしている方で、各派遣先で藤前干潟のために学びを得ようとする強い姿勢が見られました。派遣後の学習会では、見て感じたことや藤前干潟で行いたいことなどについて次々と具体的な意見交換がされ、学びの深まりと熱い思いを感じました。

藤前干潟は市民などの努力によって埋め立てから守られ、ラムサール条約に登録されて20年以上が経ちました。普及啓発やごみ清掃活動などが盛んに行われてきていますが、渡り鳥の減少や干潟環境の変化、訪れる小学生の減少、歴史を知る人の減少などの課題があります。訪れた3つのラムサール条約湿地が抱える課題と共通する課題もあり、参考や励みになることも多かったのではないのでしょうか。

派遣者の方々には今回の派遣で得たことを生かし、より良い藤前干潟の未来のために行動を起こし続けてもらえることを期待しています。

名古屋市野鳥観察館 指定管理者 東海・稲永ネットワーク 野村 朋子



派遣者 (50音順)

年齢も職業も違う11人が湿地についてともに学び、この報告書を作成しました。

梅村 宏美	梅村 幸稔	加藤 翔太	川上 莉子
小林 遼香	瀬口 心音	西 亮憲	野村 朋子
松井久二子	向井 綺音	山田 哲也	

発行/名古屋市環境局環境企画課

〒460-0008 名古屋市中区栄一丁目23番13号 伏見ライフプラザ13階
TEL 052-223-1066 FAX 052-223-4199

発行年月/令和7年3月

